

氏名	歳森淳一
授与した学位	博士
専攻分野の名称	医学
学位授与番号	博甲第 5186 号
学位授与の日付	平成 27 年 6 月 30 日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科病態制御科学専攻 (学位規則第 4 条第 1 項該当)

学位論文題目	Local recurrence and complications after percutaneous radiofrequency ablation of hepatocellular carcinoma: analysis focused on tumor location (肝細胞癌に対する経皮的ラジオ波焼灼療法後の局所再発と合併症：腫瘍の局在に焦点を当てた解析)
--------	---

論文審査委員	教授 金澤 右 教授 三好 新一郎 教授 八木 孝仁
--------	----------------------------

学位論文内容の要旨

この研究の目的は、肝細胞癌（HCC）に対するラジオ波焼灼療法（RFA）後の局所再発、合併症に関して調査を行うことであった。2001 年 4 月から 2011 年 7 月に RFA を施行された HCC 症例 397 例、1455 結節を対象とした。（男性 256 例、年齢の中央値 69 歳、大きさの中央値 17mm）。すべての再発と局所再発と合併症の因子解析を行った。1455 結節のうち 113 結節で局所再発が認められた。1、3、5 年の局所再発率はそれぞれ 2.2%、7.4%、9.5%であった。多変量解析では腫瘍の大きさ（>2cm）、腫瘍の局在（主要な門脈や肝静脈との近接）、焼灼マージンの小ささ（<3mm）が局所再発の独立因子であった。腫瘍の局在（主要な門脈、肝静脈、横隔膜との近接）が RFA 後の肝障害の危険因子として示された。HCC が主要な門脈や肝管に近接していると局所再発や合併症のリスクが高まり、腫瘍がアプローチしやすい場所にあるときでも、特別な注意が必要であると考えられた。

論文審査結果の要旨

本研究は、岡山大学病院でラジオ波焼灼療法により治療された肝細胞癌 1455 結節（397 症例）を対象として、異所、局所を含むすべての再発、局所再発、合併症の因子解析を行ったものである。その結果、局所再発は 1、3、5 年でそれぞれ 2.2%、7.4%、9.5%であり、多変量解析により、腫瘍の大きさ（2 cm を越える）、腫瘍の局在（門脈、肝静脈との近接）、焼灼マージンの小ささ（3mm 未満）が局所再発の独立因子であることが明らかになった。また、肝障害については、腫瘍の局在（門脈、肝静脈、横隔膜との近接）が危険因子であることが示された。

肝細胞癌に対するラジオ波焼灼療法は、低侵襲治療として確立した治療であるが、このような多数病変の解析により治療の成績を評価し、再発や肝機能障害の危険因子をあきらかにすることは、今後この治療がさらに発展していくうえで意義が深いと考えられる。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。